

京鹿子

本誌は、昭和十一年八月創刊。以来、毎月一冊出版。発行所は、東京市千代田区千代田一丁目一番地。電話二二二二。

8月号

鈴鹿呂仁

拾掬集 その八十三



時計草巻きつくものに風と空
秒殺の風は虜に時計草
豆飯や思案にくれし四畳半
梅雨寒やですます調のナビの声
甚平をたたためば消ゆる怒り肩
水鉄砲落し所の狙い撃ち

ひねもすの楽土借り切る砂時計
影ひとつ掬うておまけ金魚売
遠距離の恋はスマホに遠花火
朱色濃きメトロ路線 江戸炎ゆる

吟行・草津宿

追分は夢の通り路みちをしへ
守宮鳴く脇本陣の知足かな
宿帳の翳る紙魚あと草津宿
夕虹を皇女と重ね草津宿

近詠

和田 照海

水鶏叩く

水鶏叩く水郷の灯の低ければ
近づけば水棹つかはず浮巢舟
池畔日和出払つてゐる浮巢かな
散骨の海は紺碧雲の脇
島離る船の小渦や青岬



近詠

松本 鷹根

薄情

葉桜の陰をたよりに岩に坐す
帯固む柿の周辺眩しみて
蓮の田の手入れ無用の花ざかり
植田はや風の笑窪となる丈に
薄情は声にならざる蝉しきる



塩貝 朱千



玉手箱

「薔薇は憧れ」詩に捧げし薔薇かをる
ばらジェラートよく売れる日よ鴉啼く
アンネの薔薇平和を揺らす風の中
夏の暁なぜか哀しい港の灯
玉手箱もくもく詰めむ入道雲

英華採集

ぼうたんや昨日の皿にのせる今日
牡丹の花言葉は「王者の風格」であり、中国の唐以来「花の王」としてどの花よりも愛でられるようになった。さらに、唐の玄宗皇帝がこよなく愛した絶世の美女の冠がつく楊貴妃のシンボルとして牡丹は、美の象徴として女性のあこがれの存在になっている。さて、掲句の昨日の皿の上にあったものは作者にとつて何の変哲もない平凡な日常に違いない。そして、今日と同じ物を載せなければならぬ現実がそこにあるのではないか。華麗な季語と無味乾燥な日常の取合せに人生の悄愴を感じる。

福山 藤井杏愛

囀りを真似て囀り失くしけり

荒尾 西村安子

季語「囀り」の句で一番に頭に過る句「囀りをこぼさじと抱く大樹かな」は、星野立子の名句である。春になると様々な小鳥の鳴き声を耳にするが、最も優雅に心地好い声は鶯であろうか。この鳴き声に違いはあるものの殆どが雄鳥からの求愛の声と自分たちの領域を示す威嚇の声と言われる。掲句は、その囀りを聞いて気持ちが高揚したのか口笛で真似をしたのであろう。余りにも違いがあったのか？鳴いていた小鳥も啞然としたのではないか。実に俳味があり楽しい一句となる。

子供の日孫と曾孫の日で暮るる

荒尾 荒尾かのこ

子供の日は、戦後に制定された国民の祝日で端午の節句でもあり三月三日の桃の節句と比較されると男の子の節句のようだが男女の別はない。そして、この日は鯉のぼりを掲げる風習があるが鯉は出世魚として「滝を登りきった鯉は龍になる」という中国の故事に因んだもので子供の成長を願っている。当然、父母から見ている子供になるが昨今の家族構成では祖父母が役割を大きく担っている。目に入れても痛くないほどの溺愛ぶりが中七下五の措辞にある。

明易や 沼田巴字

みどり雨 北川孝子

七転び八起きの生や走馬灯
若き日の雑魚寝の旅や夏の果
明易や平家の結び哀れなる
大志持てと言ひし人あり椎若葉
赤のまま老後を頼む人のみて

山青く山の老いゆく運動会
ときめきや薄暑しぐれに出逢ひけり
指切りのあとの歳月みどり雨
三十六峰しぐれ日和に出逢ふ町
聞き役のいつか語り手みどり雨

青 嵐 植村蘇星

つつじ 直江裕子

木漏日やきらりデュエット青もみぢ
今を生く明日に紡ぐ青葉光
小満の果菜彩る夕餉かな
妻にして時には母者合飲の花
九合目九十九折りなる青嵐

陽炎や少女攫つて行かれさう
海のごと遠いつつじの花の後
母の手はもう戻れない春の渚
背後より蝶くる気配本ひらく
四月馬鹿バナナの種が見つからぬ

新茶の芽 高木晶子

崩るる 奥田筆子

長電話今日は主役のミニトマト
重さから言へば銅像花躑躅
楠若葉ふるさと今も有るにはある
褒め言葉鉢をはみ出す君子蘭
人の手の及ばぬやうに新茶の芽

崩るるは易し祭の輪もビルも
起承転結破壊伴ふ時計草
当てにする甘さを思ふ枇杷の種
集中力失せてかやつり草いびつ
あぢさゐやせせらぎ愛の口ぐるま

メビウスの帯 伊藤希眸

ノンポリ 井上菜摘子

沼光る水漬陽漬に残る鴨
メビウスの帯切れ夫は夏星へ
檉若葉やすらぐ太幹人を集せ
引鶴の終へしみ空の碧深し
体操して帰る朧五月晴

胸中の森深くゐて夕かなかな
鉛筆を尖らせておく浦上忌
ノンポリでゐられたころの白朝顔
朝顔もわれも力を抜く正午
秋の蝶風葬の野を耀へり

神麓集

吃水線 村田あを衣

さくら葉桜けふ細筆の紅をさす
小満や故郷の海を満たす画布
筆順のまよひ葉ざくら明りかな
花は葉に晴ればれ嘘を受け流す
小満や吾が吃水線は揺るがざる

白木蓮 山中志津子

葉桜にルビ振るやうに女学生
白木蓮流浪の民のうたげふと
切字のやうすつくと窓の白樺
万感の思ひ届けと薔薇つぼみ
春雨の隈なし破壊されし街に

少女アリス 井尻妙子

あをぞらに万歳をして梅雨仕舞ふ
明け易の絵本に帰る少女アリス
八月の入口先づは合掌す
夏旺ん筋トレ三日目の挫折
レタスチャーハン焦がす晩夏の私ごと

新緑の時空 鷺山珀眉

新緑の時空 口笛は透明
逃げ水や追ひかけつこのやうな恋
奥庭に竹皮を脱ぐ日差しかな
若夏の大樹に結ぶ空の端
雑魚寝かな早苗月夜の宿畳

春愁 亀井福恵

春愁といふ曖昧を飼ひならす
対岸も此岸もさくらさくらかな
揚雲雀その向かうには戦の火
相槌に一步遅れて目借時
恋の絵馬受験の絵馬と隣りあふ

決断 菊池和子

子燕のとんと一舞ひして離宮
葉桜や行間うめる新刊書
決断のころころ変はる濃紫陽花
浄水を掬うて初夏をわが胸に
鮎焼くや水のにほひのする人と

村は一枚 西村白杼

小満や田水の光る村一枚
小満や棚田千枚光り合ふ
田の水に八十八夜の白い雲
職退きて青空美しき花は葉に
山里の黙をふるはず雉の声

終生は旅 安田優歌

山波はタテヨコ緑あざあざし
陽炎に躓ひてゐる天狗どち
風戯へ風のささやき九輪草
終生は旅なり身ぬち陽炎へる
河鹿笛薄暮よせくる摂津峡

繭ごもる 本郷 公子

夜の新樹ゆらすワインの影零る
あぢさゐの青き影添ふ雨の彩
痛む身に生ある証梅雨の月
小満の山雨明るし野の潤ふ
繭ごもる浅き眠りや昼の月

樟若葉 石原 孝人

雨意の雲行方読みつつ蘭草染め
来し方を問はず語りに夏帽子
まだ濡れてゐる青空や樟若葉
寄せ書きの残るアルバム花は葉に
万緑の底ひに絹の流れかな

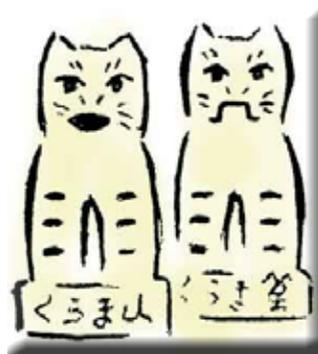


京鹿子集

鈴鹿呂仁 選

透きとほる八十八夜の水を干す 岡山 佐藤 千恵

せえのおで五月の薔薇の咲きそるふ
家中に巡らす手摺り余花の風
夕風に牡丹崩れ闇崩れ
まなかひに父の温顔白牡丹



ぼうたんや昨日の血にのせる今日 福山 藤井 杏愛

はつなつの雲に乗せたる里心
ふらここの届く先より黄昏れる
繰り言の仕舞を待ちてあやめ聳く
うつし世に目を閉ぢて吹く麦の笛
囁りを真似て囁り失くしけり

荒尾 西村 安子

有明の海の青さよ夏来る
この村を知り尽くしたる夏燕
汐干潟沖に輝く残り潮

子供の日孫と曾孫の日で暮るる

火吹竹登り窯守るみどりの夜
 麦秋の空の続きのウクライナ
 青シャツと穂麦の色のズボンはく
 母の日や母に健康てふ宝

荒尾かのこ



その姿モデルみたいな花水木

戸田 遠山 悟史

行楽の渋滞疲れ菖蒲風呂

まろやかを舌で転がす新茶かな

朝日射す青葉若葉の煌めきて

ビール飲む女性を狙ふコマージュシャル

白牡丹諦観といふひとりごと

梅原ひろし

青葉木菟ホーホーと鳴きつ古寺暮るる

低空の技たしかむる夏つばめ

がまがへる蹲踞鋸となりて坊主めく

存分に地球の匂ひ梅雨に入る

さくらんぼ「ただいま」の声風に乗る 市川 小島 正士

一枚の切手のなかの菖蒲田や

玄関の筭伸びて見張り番

山つつじ迷ひきた道振り返る

走り梅雨ちから抜くこと覚えけり

小鳥来て青梅ぼつと赤み増す

松戸 岡山 敦子

新茶汲む一人きりの部屋まろし

春愁ひ閻魔目こぼす民の末

春の月影より聞こゆ南無阿弥陀

諍ひと疫禍の世界春満月

夏紺さらりと昭和着こなせり

習志野 上野 紫泉

白磁割るごとくおのき牡丹散る

赤き薔薇くづれるまでは鬼女でした

緑蔭に入りて話の弾みだす

丸き背ナ空也上人春歩く

杉の花せめぎあふ間の矛と盾

船橋 元橋 孝之

何れ彼に後継ぎ託す夕桜

ときは巡り去ぬひと想ふむべの花

目覚め初む苺の花の恋可憐

椿揺れ片道切符冥土路